1911J04 遠藤周作

あの日を生きようとした人々の名前

宮城県名取市にある閖上地区。この町もまた、2011 年３月 11 日に起きた東日本大震災によって被災した。10 月 17 日、私たち尚絅学院大生は、取材のためにこの町を訪れた。そこで私たちは、この町についての語り部の一人である、丹野祐子さんと出会った。

幸せな日常を襲った津波

当時の震災を経験した私たちではあるが、この町で起こった出来事についてはまだ何も知らない。祐子さんはそんな私たちに震災の経験を語ってくれた。

祐子さんが閖上町に嫁いできたのは 1998 年。夫との間には長女と息子の公太さんが生まれ、子供たちの育児をきっかけに移住した。隣には夫の実家があり、義父母が住み、この６人家族で毎日を笑って楽しく過ごしていたという。そのころの祐子さんは、この町が自分にとっての「終の住処」と信じて疑わなかった。しかし、そんな幸せな日常を東日本大震災が襲った。

2011 年３月 11 日午後２時 46 分、大地震が発生。その時は、閖上中学校で行われた長女の卒業式を終え、公民館で謝恩会の最中だった。やがて津波が閖上の町を襲い、義父母と公太さんが逃げ遅れ、帰らぬ人となってしまった。

慰霊碑に触れてほしい

震災後、祐子さんは、公太さんをはじめ閖上中学校の亡くなった生徒たち 14 名の遺族有志と共に慰霊碑を立てた。津波によって自宅も流され、公太さんの思い出の品々は失われた。母子手帳、へその緒、写真、ビデオ。だが、それでもまだ息子のために残せるものがあった。それが、祐子さんが公太さん自身に付けた「名前」だった。

「名前は親が（子に）最初に贈るプレゼント」

そう、祐子さんは慰霊碑の前で私たちに語ってくれた。息子に関わる物がすべて流されたとしても、名前だけは残したかった、そのために慰霊碑を立てたという。

「どうぞ碑に直接手を触れて、生きたくても生きられなかった子供たちがここにいたことを、肌で感じてほしい、温めてあげてほしい」

「ここに閖上という町があったこと、私に丹野公太という当時 13 歳の息子がいたこと、それを忘れてほしくない」

それが祐子さんの願いだという。

一人一人の名前を忘れないで

私たちが閖上にある名取市震災メモリアル公園を訪れた際に、市内の津波の犠牲者全員の名が刻まれた慰霊碑を前に祐子さんはこう語ってくれた。

「数ではありません。名前一人一人にドラマがあります」

この慰霊碑には、あの日から先を生きることができなかった人々の名前が刻まれてあった。子どもを亡くした親、親を亡くした子、おじいちゃんおばあちゃん、この町に来ていた人、あるいは家族全員。この一人一人の名前に人生があった、この町に彼らの物語があったことを忘れないでほしい、と祐子さんは語った。

これからも、たくさんの人々が閖上の町を訪れるのだろう。その時は、慰霊碑をぜひ訪ねてもらえたら。震災前の日々を生きた人々の名前がある閖上中学校前の慰霊碑を、そして名取市震災メモリアル公園の慰霊碑を見てほしい。祐子さんの息子である公太さんをはじめ、たくさんの人々の物語がここにある。町が復旧し風景が変わっても、震災で亡くなった人たちの名前は忘れないでほしい。そう私は願う。

2011A10 木村篤耶

一変した人生　息子の死をきっかけに「被災地巡礼」

2011 年３月 11 日に起きた未曽有の東日本大震災。その津波は東北の太平洋沿岸のあらゆるものを呑み込んだ。荒セツ子さんは、名取、岩沼両市にまたがる仙台空港近くで警察官だった息子を亡くした遺族の１人。荒さんはその年から、遺体が見つかった３月 15 日にちなみ、月命日の 15 日になると現場周辺を歩き、温めた水をあげて祈る「巡礼」を続けてきた。それはなぜなのか。その思いを聴いた。

しっかり者だった息子の死、母の憤り

荒さんの息子である貴行さんは、岩沼警察署に務める巡査長だった。彼は、「一番最初に自分たちがダメになってはいけない」との行動理念を掲げる、責任感の強い性格の持ち主。震災発生後に出動を命じられ、仙台空港（名取市・岩沼市）の近辺で避難誘導を行っていたという。しかし、同僚の警部補らと共に行方不明となってしまう。大津波が内陸の仙台空港まで押し寄せたのだ。

その後、浸水した付近の工場の工場長が貴行さんの警察手帳を発見。そして４日後には貴行さんが遺体となって、母親と対面したのだった。荒さんは息子の上司たちに「なぜ、若い人たちを助けなかったのか。なぜ上の者が行ってやらなかったのか。」と激しい怒りをぶつけたという。

「息子に会う旅」　亡くなった人々への願い

荒さんは、貴行さんが見つかった３月 15 日を「命日」と心に決め、月命日の毎月 15 日の午後２時 46 分から、仙台空港から遺体発見現場の工場まで歩き、祈りを捧げてきた。震災の年に始まり、途中、慰霊碑や墓地に立ち寄りながら、震災によって亡くなった人々を悼みながら歩く巡礼になった。

体温ほどに温めた水をリュックに持参し、慰霊碑に刻まれた、亡くなった一人一人の名前に注いでは手を合わせている。「寒い日に、この世のものとは思えない冷たい水 の中で亡くなった方々が、寂しい思いをされないようにしたい」。そのような思いを胸に、震災で変わり果てた地域を巡り続ける。

そして、これらの行動を「息子に会う旅」と語る。また、彼女は震災で同様にわが子を亡くした母親らの集まり、仙台の「つむぎの会」、岩沼の「灯里（あかり）の会」にも毎月参加している。

その仲間たちは、「わが子の出生と死後の表情を見ている」という悲しみと、わずか一瞬で平穏な日常が壊されてしまった、という共通点で結ばれている。荒さんは、巡礼してきた現地で別の遺族たちにも出会い、その亡き家族にも「温めた水」をあげる。「あの日、冷たい水の中で逝った苦しみは同じ」だから。

変わる被災地の風景、震災遺構の消失

コロナ禍でやまなく中断しながらも、荒さんが毎月通い続けてきた被災地。そこには、震災の悲惨さを伝えるために持ち主が残した民家の遺構も存在していた。また荒さんは、27 歳でこの世を去った櫻井佳奈さんという女性も知った。ほとんど草原となってしまった家の跡にたたずみ、彼女の部屋だった場所に置かれた小さな慰霊の石にも手を合わせた。

しかし、その地域は工場などの建設予定地となっており、急ピッチで造成工事が進み、民家の遺構も、佳奈さんの家の跡もなくなってしまった。荒さんのように被災者を悼む人がいることを知る一方で、このように被災地の記憶を伝える風景の消失が起きていることに、私は不安を抱いている。

それでも荒さんは、命ある限り、巡礼の旅を続けていくという。

2011D19 関恵杜

「心に生きる息子」　震災から 10 年、閖上で語り続ける

東日本大震災から丸 11 年を迎える被災地、宮城県名取市閖上。そこに語り部の丹野祐子さんがいる。津波で中学１年生だった息子公太さんを亡くした。あの日、「津波なんて来ないから」と告げた自分を悔やみ、責めたという。その体験と向き合い、中学生たち慰霊碑の前で「命」のかけがえなさを来訪者たちに語り続ける。閖上にとどまり、語り部になった理由とは？

「津波は来ない」の言葉への後悔

2011 年３月 11 日の大震災が発生し、津波が押し寄せた名取市閖上。丹野裕子さんはその少し前まで、閖上中学校３年生だった長女の卒業式の後、謝恩会が開かれた公民館にいた。

突然の大地震を知った時も、「津波が閖上に押し寄せる事を想像する住民は、当時の閖上には少なかった」と振り返る。津波で被災したという伝承がなかったからだ。丹野さんはその時、公民館のグラウンドで友達と遊んでいた中学 1 年の息子公太さんにこう言った。「津波なんて来ないから」。その言葉が、息子との最後の会話になるとは思いもしなかった。

しばらくして津波が閖上に押し寄せる。その光景は、丹野さんの想像を絶するものだった、と語る。海岸の松や家々が津波によって跡形もなく流された。そして、津波によって失われた多く命。あの混乱の中で公太さんは行方が分からなくなり、帰らぬ人となった。

当時の状況を振り返り、丹野さんは、「自分が、津波なんて来ないと言ってしまったために、息子に辛い思いさせてしまった。息子に謝りたい」と語り、そんな言葉を伝えてしまった自分が後悔の念で押し潰されるようだったという。そのつらい体験が、丹野さんが語り部として人生を歩むきっかけになる。

慰霊碑に触れ、思い出して

多くの人々の命とともに、跡形もなく流された閖上の光景、懸命に生きていた閖上の人々を思い出すように、丹野さんは、取材に訪れた私たちに語った。

「時とともに、生きている人だけにスポットライトが当たっていく。亡くなった人たちはこのまま忘れられてしまうんじゃないか…。息子はここにいるのに」

だからこそ自分が閖上への訪問者に語り続けることで、亡くなった人々を忘れないでほしい、震災のことを忘れないでほしい。そんな思いが、語り部を続ける一番大きな力であると語る。

丹野さんは東日本大震災で亡くなった閖上中の 14 人の生徒の慰霊碑を遺族の有志と共に建て、今、閖上小中学校の脇にある慰霊碑の前でこう語った。

「この慰霊碑は、誰かに触れてもらうことで、亡くなった人たちを思い出してもらう。そんな願いを込めて作ったものです」

息子たちの名前を残すことで、第二の犠牲を避ける、つまり現世の人から忘れられてほし

くないという強い想いで慰霊碑を建てたのだという。

丹野さんはそれから 11 年間、漫画が大好きだった公太さんのため、愛読した少年ジャンプが発売されるたびに毎回欠かさず買い続けている。閖上に再建した家に息子の部屋を造り、本棚には５００冊も並ぶ。「たまに帰ってきて読んでほしい」と語り、それが家を現地に再建した大きな理由だったそうだ。

自分の言葉で語り続けたい

丹野さんが語り部をする理由の一つには、広島市で原爆を体験した語り部の声を聞き、その言葉の重みに鳥肌が立ったという経験がある。「実際に震災を体験した者だからこそ伝えられる体験やリアリティーのある話を、自分自身の言葉で伝えたい」と話す。

当時の状況を知ってもらいたい。震災の当事者で、今もつらい気持ちを打ち明けられずにいる人たちのための拠り所をつくりたい。震災で亡くなった多くの人々、そして自分の息子のたちのことを忘れないであげてほしい―。

そんなさまざま思いを力に、丹野さんはこれからも公太さんを思い続け、ここ閖上に残り、語り部を続けていくという。

丹野さんが活動している閖上の伝承施設「閖上の記憶」。ありのままの実体験の声を聞き、いつまでも震災を忘れず、人と人との絆の大切さを知るために一度足を運んでみてはどうだろうか。

2012A01 阿部航己

生き延びたからこそ　津波で息子を亡くして 11 年、母が語る

東日本大震災で津波の被災地となった名取市閖上。尚絅学院大学の授業で昨年 10 月、取材に訪れた私は、語り部の丹野祐子さんと出会った。あの日の津波で閖上中１年の息子公太さんを亡くしたという。そして、犠牲になった中学生たちの慰霊碑を守り続けている。なぜ、つらい記憶の場所になった閖上に留まり、語り部になったのだろう。それは、「公太が忘れ去られないため」「子どもたちを忘れてほしくないから」。丹野さんの思いを聴いた。

ビデオの津波映像に驚く

閖上の観光名所、ゆりあげ朝市の隣に立つ伝承施設「閖上の記憶」。そこで丹野さんは最初に、私たちに一本のビデオを見せてくれた。震災当日の津波の映像だった。誰もがニュースで一度は津波の映像を見たことはあるだろう。が、自分がたった今バスで通ってきた道にも、今ビデオを見ているこの場所にも、津波が来たという事実を聞いて背筋が凍った。そこには、映し手の周囲の人の悲鳴、津波を背に必死で走る人々が映っていた。それを見て私は、こんなにもギリギリのところで人の生死は分かれたのか、と驚きを隠せなかった。

「いまあるのは復興じゃない」

取材に訪れた日の閖上で知ったのは、真新しい町と見渡す限りの空地、そして今では想像もつかない震災前の町があったこと。「閖上の記憶」で丹野さんが語ったのは、「いまあるのは『復旧』で、『復興』じゃない」という言葉だった。

それを聞いてハッとさせられた。私が今まで想像していた復興というのは、そこにいた人々がまた暮らすことができることであった。だから私は、新たに家が立ち並んでいる閖上を見て、この町はどんどん復興していっているのだなと感じていた。だが、違った。

丹野さんは言った。「息子の公太が生き返ってこない限り、どれだけ新しい家が並ぼうと、復興ではなく復旧なのです」。

私は今まで震災についての想像の中で、「人」をないがしろに思っていたつもりはなかったが、亡くなった人々に目をやっていなかったのだと分かった。元の暮らしというのは、当時生きていた人が全員、帰ってきて初めて成せる奇跡なのだと知った。

風化していく「あの日」　閖上に何が起きたのか

11 年前のあの日、大地震が起きてから津波が来るまでには、少しの時間があった。その時、丹野さんは息子の閖上中学校１年生の息子、公太さんと一緒に公民館にいた。３年生だった長女の卒業式の後の謝恩会が開かれていた。

グラウンドで友だちと遊んでいた公太さんに、丹野さんは「津波は来ないから」という言葉をかけてしまった。閖上には、過去に地震はあっても津波で被災したという伝承はなかった。そこから出た言葉が、息子の生死につながってしまったのではないか、という。

息子との別れ、母の後悔

「津波は来ない」と聞いたからだったのか。混乱の中で公太さんは、公民館の２階に避難した丹野さんの視界を離れて見えなくなった。別の場所にある閖上中学校に友人と移動していく姿を見た、という話を耳にしたのは数年後だ。

公太さんは亡くなり、丹野さんはとても後悔していると、インタビューのため訪れた教室で語った。「もし、もう一度公太さんに会えるのなら何という言葉を掛けますか？」という私の問いに、丹野さんは「津波なんて来ない、と言ってごめんと謝りたい」と語った。

そんな思いから丹野さんは、公太さんを忘れ去られないために、つらい過去と向き合い、語り部として生きる人生を選んだ。

「命」を語り継いでいく

今、新しい閖上小中学校の傍らには、津波で亡くなった 14 人の生徒の名前が彫られた慰霊碑が置かれている。学校の中ではなく道路沿いの広場で、その理由は、「訪れる多くの人に触れてほしい」という願いからだという。

その慰霊碑の前で丹野さんは、「つらい記憶に背を向けると心を苛まれるが、向き合えば力になる」という言葉を語った。それを生きる力にするためにも、丹野さんは過去と向きっているのだと私は思った、

丹野さんは公太さんだけではなく、「私は、亡くなった 14 人全員の応援団であり続ける。そして息子たちのことを忘れ去られないために、これからも自分の口で生の声を届ける語り部としての活動を続けていく」と、力強く私たちに話してくれた。

2012A13　小野香織梨

停まった時間を動かす心療科医
～「語れない」原発事故被災者を支えるには～

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で起きた東京電力福島第一原発事故から 11 年。現在も福島県の被災地の約 4 万人（復興庁 HP より）の住民は避難を余儀なくされている。精神科医の蟻塚亮二さんは原発事故の後、相馬市を拠点に被災者の心のケアを行ってきた。訪れる患者の多くは、体験してきたことをあまり話したがらないという。心の傷を抱えた人を手助けするために、他者にできることは何か。被災者を見つめてきた蟻塚さんを紹介したい。

目に見えぬ心的影響、戦争体験並みにも -

原発事故被災地で、現在も帰還困難区域の福島県浪江町津島地区。住民のうち 500 名を対象に 2019 年に行われた調査では、PTSD（心的外傷後ストレス）の発症は 48.5%という結果であった。日本国内の震災の被災地では非常に高いという。

授業でインタビューをさせてもらった蟻塚さんは、沖縄の病院におられた際、太平洋戦争の沖縄戦を体験した高齢者 400 名を対象に同様の調査をし、39.3%という結果だった。「原発事故被災者の PTSD の発症率の高さは、戦争によるトラウマ（心の傷）並みである」と話してくれた。

さらに蟻塚さんの話では、避難回数が 4 回以上になると精神症状が悪化する、という報告もあるという。津島地区の平均避難回数は 4.65 回。重度の精神不調を訴える人は、県内避難者が 26.6%、県外移住者が 43.3%で、「避難回数だけではなく県外移住は PTSD の発症リスクと精神健康状態の悪化を高めている」と説明してくれた。

「栄光ある勝者」へ尊敬を持って向き合う - 蟻塚さんが語る治療の心得 -

蟻塚さんは 2012 年から、相馬市に「メンタルクリニックなごみ」という診療所を設け、被災者のカウンセリングを行っている。原発事故の後、毎月 300 人程の来談があったという。患者の多くは自身が「うつ病ではないか」と感じて来院するが、話を聞くと、原発事故から避難した心の傷から PTSD を発症している人が多かった。「トラウマの記憶は無意識に心の底にしまい込まれ、本人が気付かない多様な症状で苦しめる」という。

その様子を蟻塚さんは「PTSD はうつ病のふりをしてやってくる」と例えた。訪れる患者は原発事故後に体験してきたことを話したがらず、「自分が死ぬまで抱えていく」と話した人もいた。しかし、この「語れない状況」が恐怖の記憶を長く心に保存してしまい、PTSD のリスクを高めるのだそうだ。

インタビューの中で蟻塚さんは、被災体験に苦しむ人々に対して「尊敬の気持ちを持たなければならない」と強く語り、彼らを「Winner（勝者)」であると述べた。なぜ尊敬されるのか、なぜ「Winner」なのだろうか。

原発事故の被災者には、原発事故から古里を遠く離れて避難し、精神的な不調からクリニックに来院することにも恥ずかしさを感じ、敗北感を抱く人もいる。自分の家も土地は残っているのに帰ることができない、住む場所を転々とし続けて未来が見えない―。

そんな「仮の人生」が続くことに苦しみ、希死念慮する（死にたいという気持ちを抱く）患者もいたという。しかし、蟻塚さんの診療を受けに訪れたのは、そんな状況を改善したい、立ち直りたいという思いがあったからではないだろうか。

蟻塚さんはつらい体験をして生きる人たちを「栄光ある勝者」として尊敬し、苦難に打ち克った「勝者」であると気付かせることが、回復のためにとても大切なことだと教えてくれた。

動き出す時間と私たちにできること－非体験者として寄り添うとは何か－

PTSD から回復した人のほとんどは診療所に来なくなったという。蟻塚さんは、「早期発見ができたことや生活条件、家族関係の改善があったから」と説明した。そうした治療が、「仮の人生」を生きてきた人へカウンセリングを通し、停まっていた本来の人生を再び動かしたと言ってもよいのではないかと私は考える。

最後に、蟻塚さんにとって「寄り添う」とは何か―を質問した。「非体験者」である私たちは体験者に代わって、原発事故にまつわる体験をすることができない。その「壁」に無力感や絶望を抱くのではなく、体験者の話を聴くことが、私たちにできる「寄り添う」ということではないか。そう教えてもらった。

2111A22　増村穂南

「復興」と「復旧」の差　わが子を亡くした語り部が閖上に住み続ける訳

東日本大震災の被災地である宮城県名取市閖上。あの日、閖上を襲った津波で息子を亡くした丹野祐子さん。現在、彼女は語り部として当時のことを、多くの人に語り続けている。尚絅学院大学の授業で閖上取材に訪れた際、「復興したのではなく、復旧しただけ」だと語った丹野さんに驚きを感じた。きれいに道路が整備され、人々の活気が戻り、震災以前の閖上に見えたからだ。彼女の言葉にどのような思いがあるのか、私は触れてみたいと思った。

語り部としての活動

丹野さんは語り部の活動を、地元の伝承施設「閖上の記憶」を拠点に行っている。出張語り部として全国で講演も行い、「自分の命と大切な人の命を守る」ことを伝えている。

震災後、津波で亡くなった旧閖上中学校の生徒たちの慰霊碑を建てるための活動にも取り組んだ。新しい閖上小中学校の傍らの広場にある御影石の慰霊碑は、亡くなった息子公太さんら 14 人の子どもの名前を刻んでいる。

名前を刻むことに特別な思いがあったという。「名前はわが子への最初の贈り物であり、語る人・震災を知る人がいなくなってしまったとしても残したい」と考えたから。丹野さんと一緒に慰霊碑を訪ねた際、「碑を触ってあげてください」と言われた。その時は、触るという行為に意味があるのだと思っていたが、「常に温もりのある碑であってほしい」という彼女の願いがあることを後から知った。

毎年３月 11 日には、白い鳩の形のエコロジーバルーンで文字を空（＝天）に毎年飛ばす活動も行っている。丹野さんは「たまには帰っておいで」とメッセージを送っているそうだ。私はこの話を聞いて、環境のことも考えた活動の仕方に共感した。

語り部を始めたきっかけ

丹野さんは、公太さんら「14 人の子どもたちの応援団でいたい」と強く語った。それは「自分が伝えなくては、なかったことにされてしまう」と感じたからだ。「なかったことにしたくない」という思いが、語り部の活動のきっかけになった。

また、その活動が「自分が生き残ったことの言い訳をしているのかもしれない」とも漏らした。閖上地区では、過去の津波被害がほとんど伝承されていなかったことから、多くの人が「津波が来るわけがない」と思い、避難することが遅れたといわれる。丹野さんも、公太さんに「津波は来ない」と伝えたと語った。

だが、想像をはるかに上回る津波が閖上を襲った。数年後に聞いた話では、閖上中学校へ向かって公太さんが走っていた、というのが最後に目撃された姿だった。「もし、息子に会えるなら、津波なんか来ないと言ってしまったことを謝りたい」と大学でのインタビューで話してくれた。普段の丹野さんはハキハキと話す方という印象を持っていたが、この時は、自責の念がこもった心の痛みを感じた。

丹野さんは、閖上から離れずに自宅の現地再建をする道を選んだ。新しい家には、公太さんの部屋があり、大好きだった週刊少年ジャンプを本棚に並べているという。「息子に、たまには帰ってきて一番に読んでほしいと願っているので、自分では開いたことがない」と語った。いつか自身が逝く時、ジャンプも焼いて煙を天に届けたい、とも。

「復興」と「復旧」の差

現在の閖上は「復興しているわけではない」という。丹野さんが「復興」と呼べる日が来るのは、閖上が以前の街並みと何も変わらずに戻り、息子が生きて帰って来る時だけ、と。

「家族の前であの日の話はしない」とも語った。「あの日の話をしてしまったら、家族は私を責めたくなるかもしれない」という。物理的な面でも心の面でも「復旧」だけ行われてきたのが、この 10 年間の現実だったのかもしれない。

丹野さんが抱えている気持ちを完全に理解することは誰にもできない。それでも彼女が語り続ける限り、私は彼女の応援団でいたいと思う。

2111B04 遠藤大喜

震災後から現在、閖上はどう変わったのか

2011 年３月 11 日の東日本大震災の津波で、大きな被害を受けた名取市閖上の取材をした。昨年 10 月に現地で出会った語り部の丹野祐子さん、「かわまちてらす閖上」専務の佐藤智明さんから、閖上が震災を経てどの様に変わり、今があるのか、お話を聴いた。

津波前後の閖上の悲劇

丹野祐子さんは震災前、閖上の一人の主婦、母親であり、生活はとても裕福ではないけれど、家族との和やかな日常の会話や食事、子育てや近隣の住民との交流など、幸せな生活を送っていた。しかし、３月 11 日の津波で閖上の町は全て流された。丹野さんは最愛の息子、閖上中学校１年生だった公太さんと離れ離れになり、亡くしてしまった。

私たちがふだん何気なく送っている生活が、一瞬にしてなくなってしまうのである。ただ、私のいた場所が被災地にならず、丹野さんは閖上に住んでいた、という偶然の違いだけで。被災した直後の丹野さんは、「現状が受け入れられず、毎日どこか心に穴が開いたようだった」と当時のことを語った。

にぎわう新しい閖上

取材で訪ねた閖上では、ゆりあげ朝市が魚の競りでとてもにぎわっていた。多くの客が集まり、その中心では競りの司会の人が大きな声で魚の値段を言っていた。また、屋台が並ぶ場所でも多くの客が魚を買ったり、海鮮丼を食べていたり、カキを焼いて食べたりしていた。2019 年にオープンした商業施設の「かわまちてらす閖上」は、今風のカフェなどが並んでおり、海もよく見え、とても見栄えのする景色で若い人もたくさんいた。

かわまちてらす閖上の専務であり、「まるしげ漁亭浜や」社長の佐藤さんが閖上の商業再興に取り組んだ体験談を現地で聴き、生活の法則、すじみちというものを教わった。気づきと実践、純粋倫理、経営者の自己革新、心の経営、人々のネットワーク、地域社会の発展―。これらのキーワードは新しい経営をする上でとても大切である、と語った。

また、佐藤さんの言葉に、「人生は神の演劇、その主役は己（おのれ）自身である」、「成功への勇気、潜在能力への種まき。見えない世界の活用」という言葉があった。震災でどんなにつらい経験をしても、自分はその物語の主人公であることを忘れないことがとても重要なことだ、と教えられた。

「復興」と「復旧」

閖上はもう復興していて、新しい町になったのだと私は思っていた。しかし、丹野さんの体験を聴いて、さらに「復旧はしたが、復興はしていない」という言葉から、実際に閖上で被災し、大切な家族を失った方の心に空いた穴はとても大きなものなのだと気づかされた。

震災から10年余りが経ち、丹野さんは語り部の活動をしながら、あのつらい経験をした閖上に家を再建した。あのころの暮らしは決して戻らないが、丹野さんは「もし自分が閖上を離れてしまったら、息子が帰ってくる場所がなくなってしまう。そうならないために今でも、息子があのころ好きだった漫画雑誌を買い続けて、本棚に並べて待っている」と話す。

私はこの取材から、今の生活が当たり前ではなくなる日がいつ来るか分からない、閖上の今があるように私たちも今を生きていかねばならない、と考えさせられた。

2111B23　三島滉生

「復興する町」への遺族の思い～10 年間息子を待ち続ける母親～

宮城県名取市の閖上地区は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で大きな被害を受けた。その 10 年後の 10 月 27 日、私たち尚絅大学院生は取材のため閖上を訪れた。そこで語り部である丹野裕子さんに出会った。

息子への後悔を背負う

丹野さんは、あの日の津波で両親と当時 13 歳だった息子公太さんを亡くした。亡くなるその日の朝、「息子と小さなことでけんかをしたことをとても後悔している」と語った。「こんなに突然、息子と会えなくなるなんて思ってもみなかった」とも。

丹野さんは震災から 10 年たった今も帰りを待つため、現地に再建した家に公太さんの部屋を設け、少年ジャンプを買い続けている。

復興の言葉の意味

「きれいな町ができたからといってもそれは復旧であり復興ではない。亡くなった人たちが帰ってくるわけではないのだから」

丹野さんの言葉だ。私たちは変わっていく町を見て「復興」という言葉をよく使うが、町並みがきれいに造られていくことは「復旧」だという。

丹野さんからの願い

「人はいつ死ぬかわからないから家族に日ごろから感謝を伝えてあげてほしい。何も言えなくなってからでは遅いのだから」

丹野さんは最後にこう訴えかけた。私たちが毎日家族と話すことができることを、当たり前のことだと思ってはいけないという。そんな気持ちに寄り添い、家族に感謝を日ごろから伝えることは私たちにしかできないことだ。

2111D09 近藤陸

「復興」ではなく「復旧」　語り部・丹野祐子さんとの出会い

２０１１年３月１１日に起きた東日本大震災から、間もなく１１年。名取市閖上の丹野祐子さんは閖上中学校１年生だった息子の公太さんを津波で亡くし、それから語り部となって体験を語り続けている。「自分の息子や当時亡くなった人たちが全部戻ってきて、やっと復興である。今あるのは復旧だ」と言う。その思いを取材した。

人の名前に意味がある

丹野さんは、地元の伝承施設「閖上の記憶」を拠点に活動する。観光や視察に来た人たちや学習旅行の子どもたちに語り続けている。丹野さんは「どんなに町の風景が変わっても、当時の状況を決して忘れてはいけない。亡くなった人の数ではなく、人の名前に意味があるのです」と語った。息子さんを亡くしながら閖上にとどまり、そう伝え続けている姿に私は感動した。

尚絅学院大学の授業で閖上を取材したのは昨年 10 月。その時、案内してくれたのが丹野さんだ。当時の被災の状況について詳しく教えてもらった。

慰霊碑の前で語る

丹野さんは、津波で犠牲になった市民の名前が書いてある慰霊碑や、息子の公太さんら亡くなった閖上中学校の 14 人の名前を刻む石碑の前で語った。「亡くなった人の数ではなく、亡くなった一人一人の名前が大切。いつまでも忘れられないために」と。

閖上小中学校の脇の広場にある、生徒たちの碑と向き合った私たちに「いつも温もりのある碑になるように触れてください」と丹野さん。私も子どもたちの名前をさすった。

町は復旧、でも復興は訪れない

私たちは、こんな身近な町でも東日本大震災で多くの犠牲者があったことを知った。あの時、ニュースでは亡くなった人の数や現地の被災状況を映していた。しかし、閖上を訪れてみて、亡くなった人の数ではなく、亡くなっていた人の名前に意味があることを知った。

今の閖上では新しい家々や商業施設が立ち並んでいるが、復興は訪れていない。なぜなら、丹野さんが言うには「復興は、当時亡くなった息子や家族、町の住民が戻ってきて、初めて復興」だから。だから、今、進んでいるのは復旧。昔の閖上の姿はないが、この地に立って思いをはせてみてほしい。

2111D25　山下侑里子

10年経っても苦しみは続く 体験の共有が被災者の助けに

東日本大震災、福島第一原発事故から間もなく11年。被災地である福島県相馬市のメンタルクリニック院長、蟻塚亮二さんは独自に多くの患者たちの話を聴き、それまで話せなかった被災体験を語ろう―という市民の集いも開いている。私は蟻塚さんのインタビューの機会を得て、「体験を個人の中にしまわせない」で共有することが大切な支援なのだと感じた。今なお人知れず苦しむ被災者に、他者である私たちも助けになれると知った。

体験の共有が被災者の抱える思いを和らげる

インタビューで印象に残る話は、蟻塚さんに「今できる被災者への支援は何か」を尋ねたところ、生活を再建する金銭と同様に、体験の共有が非常に重要だと答えてくれたことだ。

東日本大地震は、住民一人一人に巨大なトラウマ（心の傷）を与えた。被災者の多くが、「あの恐ろしい体験は自分だけのことだ」と誰にも話せず、現在まで苦しみを抱え続けてしまうという。

震災の被害の少ない地域に住んでいた私は、自分の身近な存在である家族や友人と無事を喜び合い、辛かった時のことを一緒になって振り返るができた。しかし、もし親しい人々がいなければ、そんな話はできていただろうか。

異なる境遇の体験をした人と、あの日のことを話すのは本当に難しい。蟻塚さんの開く集いは、誰にも話せなかった思いを持ち寄った人たちが分かち合う。それは、被災者の苦しみと孤立を和らげる場になるのではないか。

震災のトラウマは根強く、苦しい

私は授業を通じて、何人かの被災者の方にインタビューする機会を得たが、当事者の心境を完全に理解することはできないのだと感じた。蟻塚さんの話で驚いたことがある。福島県浪江町の帰還困難区域、津島地区から各地に避難した住民たちの間の遅発性の PTSD（心的外傷後ストレス）の発症割合が、沖縄戦など戦争によって体験者に残された心の傷と同じくらい高かったということだ。

東日本大震災は、津波という自然災害と福島第一原発事故を引き起こした。震災は、人災と異なり加害者が存在せず、問題の解決に長期の時間を要するため、どこにも怒りや憎しみなどの感情を向けることができない。

また、今まで住んでいた街や家、身近な人々、そしてお金や仕事などの全てを奪われた。戦争にはまだ、いつか帰って来られる居場所があるが、震災では元に戻ることはない。自分が生きていくはずだった未来を失ってしまう人が多いという。

私はこれまで、被災した人にとって補助金が生活の助けになると思い込んでいた。しかし、被災したことで未来を見出せなくなり、刹那的にお金を使ってしまう人、またそもそもお金を支払われない人がいるという現実を知り、ショックを受けた。

蟻塚さんの患者の中にも「震災よりもその後、生きていく方が大変だった」と語る人がいるといい、被害を受けてなお生活を再建することは難儀だ。また、さらなる逆境のように被災者へのいじめや虐待もあったという。

被災者への『リスペクト』が共生のカギに

東日本大地震から11年を迎えようとする今、計り知れない苦しみを抱え続ける被災者に、私たちができることは何だろう。

被災者と共に生きていく未来をつくるために、私は、「リスペクトする」姿勢が重要だと考えた。被災者は震災による苦境のほか、その後も周囲からの孤立や生活の困窮、いじめや侮辱行為など、多様な理由で心を傷つけられ、自身を「敗北した人」だと思いがちだという。

それに対し蟻塚さんは、「つらいけれど乗り越えてきた」、「よく生き延びてきた」と語り掛けてきた。そして、心を回復させるには「尊敬することがカギになる」と話す。

当事者ではない私たちに、その苦しみを本当に分かることはできない。しかし、その言葉に耳を傾け、リスペクトし、苦しみを分かち合い、心を和らげる居場所をつくることで、生きる負担を少しずつ軽くする。それは可能なのではないだろうか。

生きづらい環境にいる被災者と、当事者ではない私たちが共に生きるために、どうつながれるか、希望を見いだせたインタビューだった。

2111E03　氏名 内山瑠琉

「当事者にしかできない話がある」　閖上の語り部が体験を伝え続ける理由

２０１１年３月１１日に起きた東日本大震災。名取市閖上の人々は、その日襲った津波に肉親も町も暮らしも奪われた。地元で語り部の活動をしている丹野祐子さんは、義父母と息子を失った。十年余りが経った今もなお、つらい体験を多くの人に語り続けているのは、なぜだろうか。それは、「他者でなく、体験した本人にしか伝えられない」ことがあるからだという。他者の一人である私が、現地で、そしてインタビューで聴いた言葉と思いを伝えていこうと思う。

本物の話、思いだから伝わる「あの日」

丹野さんと初めて会ったのは昨年１０月１７日、閖上での大学の現地学習だった。あの３月 11 日に何が起こったのかを、語り部として一緒に現地を巡りながら語ってくれた。そこには、閖上に暮らした人々が「当たり前」の日々を失ったこと、自身も息子の公太さんや義父母を失ったつらい出来事があった。

あれから１０年余り。毎年、３月 11 日が近づいてくるとテレビなどのメディアが、震災の悲惨さや東北の被災地の復興状況を「記念日」のように伝える。しかし、現地学習で聴いた話からは、そんな情報ではなく、生々しい悲しみ苦しみが伝わってきた。震災の当事者が語る真実の体験だからだった。

亡くなった子たちも忘れないで

だが、震災の体験を人に伝えることは、自分の人生で最もつらい記憶を掘り起こすことではないのだろうか。なぜ、丹野さんは語り始めたのだろうか。

あの日、丹野さんは閖上中学校１年生の息子公太さんを津波で亡くした。同校中では全生徒の約１割、１４人が尊い命を落とした。

「１０年前のあれから、すべての優先順位は生きている人にあった。それは当たり前のことだけど、亡くなった１４人が置き去りにされてしまった気がした。生きている人だけにスポットライトが当たり、亡くなった子どもたちは過去の話にされてしまう」

そんな思いから丹野さんは、公太さんら「１４人の応援団となった。子どもたちを忘れないでほしいから」と語った。その一人一人の名前が刻まれた、誰でも温もりをもって触れることのできる慰霊碑を遺族有志で建立し、丹野さんは自ら語り部となって活動を始めた。

話したい、震災を知らない世代にも

私は、閖上での現地学習や大学でのインタビューで丹野さんのお話を聴く機会を得た。それまで東日本大震災を、自分とはかけ離れた他人事のように感じていた。福島県出身だが、海に面していない地域に住んでいたため、地震の大きな揺れはあっても避難することはなかった。

毎年３月１１日が近づくと福島でも、テレビで震災関連のニュースが連日流れる。だか、同じ県内に住んでいるが、どこか遠い場所で起きたことのような感覚だった。「もう 10 年経ったのだから、悲しい話題はもういいのでは」とも思った。

丹野さんは、しかし、最後にこう語った。「10 年経った元気になるのではなくて、ようやく涙をこぼせる人がいる。『終わった、復興した』ではなく、ようやく悲しい現実に向き合わざるを得ない、これから心の震災が始まるような人もいる」

震災を知らない世代が増えてきている。そんな世代にも、今まで関係ないと思っていた私にもできることは、これから震災と向き合う人、あの日の話を聴いてほしいと思っている人の語りに耳を傾けることではないのだろうか。

2111F06 加藤優奈

母にできること~亡き息子の部屋にいっぱいの漫画を~

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災の津波で、多くの命が奪われた宮城県名取市閖上。現地で語り部をしている丹野裕子さんは、中学 1 年生だった息子公太さんを亡くした。つらい経験の場所である閖上に家を再建し、天国にいる息子の部屋を造り、大好きだった漫画雑誌を本棚いっぱいに買い続けている。そんな母の想いとは何か。丹野さんに取材することができた。

息子のためにできること

丹野さんは公太さんを亡くした時、「なぜ息子が犠牲になって自分が生きているのか」と思い、悔しくて、悲しくてたまらなかった、と語った。そして「息子のためにできることは何か」と考えた。

震災前は、「漫画なんて読んでいないで宿題をしなさい！」とよく言っていたのに、閖上に再建した家に息子の部屋を造り、大好きだった週刊少年ジャンプを毎週買い続けている。今では 500 冊。本棚いっぱいになり、床が抜けてしまうのではないかと心配するほどになった。

「私自身は 1 冊も開いていないのです。たまには公太に帰ってきて読んでほしいから」。そのことも、現地再建の大きな理由だったという。

触れることのできる慰霊碑

新設の閖上小中学校に隣接する広場「閖上プラザ」には、津波で犠牲になった閖上中の生徒 14 名の名前を刻んだ慰霊碑がある。震災から時が経っても、子どもたちが生きた証が御影石の慰霊碑に残されている。

この慰霊碑の建立には「誰でも触れてほしい、忘れないでほしい」という丹野さんら遺族たちの願いがあった。訪れた沢山の人の手に触れられ、常に温もりのある石であってほしい―そんな想いが込められている。丹野さんに案内され、私も生徒たち一人一人の名前に触れることができた。

閖上では毎年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、白い鳩の形をしたたくさんの風船を「亡くなった人たちがいる天国へ」と飛ばしている。丹野さんも、公太さんへの「たまには帰っておいで」というメッセージを鳩に託し、大空へ飛ばすという。

津波の恐ろしさを伝えていく

閖上に、津波復興祈念資料館の「閖上の記憶」がある。震災前の閖上の地図や資料、あの日の津波に関する写真や映像を見ることができる。丹野さんはこの「閖上の記憶」を拠点に語り部をし、被災体験をした当事者だからこそ伝えられることを語り続け、公太さんを通して命の大切さを人々に伝えている。

2111F26　若穂囲優華

「帰ってきて」　思い出の場所で息子を想う、語り部の新しい家

2011 年 3 月 11 日。あの日の大地震の後、すぐ近くの公民館に一緒に避難したわが子を、津波で亡くした名取市閖上の丹野祐子さん。避難生活の後も閖上に留まることを決め、新しい家を建てた。「息子との思い出の場所にいたい」からだった。家には中学 1 年生だった公太さんの部屋があり、棚いっぱいに、大好きだった漫画雑誌が並ぶ。「帰ってきてほしい」。そう願い続け、語り部となって体験を伝え続けている丹野さん。その想いを聴いた。

亡くなった子どもたちを忘れないで

大学の講義で閖上を取材する機会を得て、「閖上の記憶」という震災の伝承施設や旧閖上中学校の犠牲者の慰霊碑などを巡って話を聴いた。語り部の活動をしている丹野さんは、あの時、すぐ近くにいた公太さんと離れ離れになり、その後、津波が何もかもをのみ込んでしまった。

私には簡単には受け止めきれない体験であった。しかし、丹野さんは何度も「忘れてはいけない」「なかったことにしない」という言葉を口にした。公太さんへの想いが丹野さんを突き動かしている、と私には思えた。

私は初めて「閖上」という場所に行ったのだが、本当にここに津波が来て、何もかも流されてしまった、と聞いて想像がつかなかった。新しく、きれいな街ができているからだった。丹野さんが公太さんと義父母も亡くしたこと、家を流されてしまったこと、公太さんと同じ閖上中学校の生徒が 14 人も津波の犠牲になってしまったことも。

「震災の直後から、生きている人が優先にされ、亡くなった人たちに何かしてあげることができなかった」「忘れられてしまうのではないかと思った」。丹野さんはそう語った。私にはその言葉のどれもが悲しく、悲惨なものであった。

そんな想いから、丹野さんは中学生 14 人のための慰霊碑を、遺族の有志たちと建立した。訪れる人に触ってもらい、常に温かい慰霊碑なのだという。「亡くなった子どもたちをいつまでも守りたい」という丹野さんの言葉に、私は心を揺さぶられた。

「語り合わない」家族の苦しみと優しさ

しかし、丹野さんにも唯一、被災体験を共有して話すことができない人たちがいる。それは家族だという。あの時、目の前で遊んでいたという息子と離れ離れになり、助けることができなかった、後悔の念に苦しんだ―という丹野さんは、「家族でその話をしたら、家族でいられなくなってしまいそうで怖い」とも、教室で打ち明けた。家族の苦しみは一人の苦しみよりも深いのだろう。あえて過去に向き合わず、語り合わないこと。それも震災が残した心の傷の深さなのだと感じた。

丹野さんは公太さんを亡くした悲しみ、悔しさを背負って生きている。しかし、近くにいなかった家族には、どうして公太さんを助けることができなかったのか、と責めたくなる気

持ちもあるのだろう。しかし、家族はその感情に互いに触れることなく 10 年を共に過ごした。

丹野さんは「何も言わない優しさもある」と語っていた。「家族であの日のことを話してしまうと、家族でいられなくなりそうで、『こわい』から話さずいるのです」とも。「その言い訳をするために、語り部をしているのかもしれない」

そう話しながら、丹野さんは公太さんの生きた証を多くの人に伝える日々を送る。津波で流された家を閖上の地に再建し、そこに公太さんのための部屋を造り、大好きだったという週刊少年ジャンプを本棚いっぱいに買い続けている。深い心の傷が癒えないけれど、亡くなった公太さんと一緒に、家族も生きている。

「遺族にならないで」　受け取ったメッセージ

福島県出身の私は、沿岸部での津波の被害よりも、地元で起きた福島第一原発事故についての報道を、切実な関心を持って見てきた。しかし、津波で大切な人を亡くした当事者に出会い、話を聴くことができて、こんなにもつらいものだったと初めて感じることができた。この経験を、私も誰かに伝えたくなった。

丹野さんの語った話で、「絶対に安全な場所はない」という言葉がとても印象に残った。自分の家や家族はずっと変わらずにあると思いこみやすい。しかし、そうではない。あの津波は一瞬にしてすべてを奪った。津波でなくても、土砂崩れや火災が起こるかもしれない。どこも危険は同じだとしたら、かけがえのないの思い出のある場所に、公太さんの部屋がある家を建てた丹野さんのような選択肢もあっていいと思う。

大切なのは「危ないときは逃げる」ということである。丹野さんは「遺族にはならないで」と語っていた。そのメッセージを受け取った私も、家族とともに後悔しないような生き方をしなければならないと感じた。

2111H25　横石瑠宇来

震災から10年、変わる景色、変わらぬ思い
～なぜ「巡礼」を続けられるのか～

「あれ、佳奈さんのお家があったところ」。大学の授業で、スライドに写った仙台空港付近の新しい工事現場を見た荒セツ子さんは、立ち上がって叫ぶように語った。この一言に、私は心を打たれ、震災が被災者の心に与えた傷について気づき、考えるようになった。被災者のメンタルクリニックを行っている精神科医の話とともに紹介したい。

犠牲者は「数」ではない

総死者数１５８９９人、行方不明２５２６人。これは2021年の時点での東日本大震災の死者・行方不明者の数で、よくニュースや新聞で取り上げられた数字である。数字というのは確実であり、インパクトがあるため多くの人の目を引きやすい。しかし、当事者が伝えたいのは「数」ではないという。

私が授業のインタビューで出会った仙台市の荒セツ子さんは、震災を体験した一人一人に生と死のドラマがあるということを教えてくれた。これから書くものは、震災で人生が変わってしまった母親のドラマである。

荒さんは2011年３月11日の津波で、36歳の警察官だった長男貴行さんを亡くした。あの大地震の後、勤務先の岩沼署から仙台空港付近へ出動を命じられ、同僚と共に行方不明になった。そして４日後の15日、亡くなっている姿を発見された。それから荒さんは毎月の月命日、貴行さんの遭難の地への「巡礼」を始めた。

被災地への巡礼の歩み

荒さんは午後２時46分、仙台空港から歩き始め、必ず北釜観音寺という再建された寺に訪れる。そこには「東日本大震災被災物故者之碑」があり、北釜区で亡くなった住民 55 人の名前が刻まれている。荒さんはリュックの中から水の入ったペットボトルを取り出し、慰霊碑に注ぐ。家で温めてから持ってきた水だ。「震災のころまだ冬の時期であり、水は寒かったと思う。温めてあげたい」という思いからだ。

巡礼を続ける中で、ある家族と出会ったという。「佳奈さん」という若い娘さんを津波で亡くすという同じ悲しみを背負う遺族だった。荒さんは、佳奈さんの家があった跡地に必ず立ち寄り、彼女の部屋があった場所の慰霊の石に温かい水を掛けるのを、巡礼の決まりごとにしていた。息子の死が荒さんを動かし、始めた巡礼が出会わせてくれた縁だった。

震災は心に傷を残した

荒さんは息子の死と巡礼を通して向き合い続ける。震災で多くの命が失われたが、「生」の側に残された家族や友人らも大きな心の傷を負ったのだ。

相馬市で「メンタルクリニックなごみ」の院長を務める蟻塚亮二さん。震災と福島第一原発事故の後、被災者の心のケアの支援を仲間の医師たちと始めた人で、やはり大学の授業でインタビューをさせてもらった。

蟻塚さんによると、クリニックを訪れた患者さんの多くは、不眠症などさまざまな悩みを訴えた。蟻塚さんは震災前、沖縄の病院で診療をした経験があり、「太平洋戦争の沖縄戦を体験した高齢者たちに現れた症状と重なった」と語った。遅発性のPTSD（心的外傷後ストレス）と診断した症状だった。

福島で原発事故からの避難を体験した人々にも見られるといい、住む場所や仕事を失ったりするなど、精神的な空虚感と未来の喪失からも生じる心の傷だ。「そうした人々に寄り添うには、まず時代背景を読み取ること。そして、自分の中にため込まずに震災経験を語ってもらう場づくりが必要」と、蟻塚さんは語った。

これからも巡礼はやめない

荒さんは震災後ずっと続けてきた巡礼を、コロナ禍や体調不良のために休まざるを得なかったという。長年歩いてきた被災地の最近の画像が授業で紹介された時、荒さんから驚きの声が上がった。仙台空港周辺の被災地の草地が、新たな開発によって変わり果てていた。佳奈さんの家があった跡地は造成工事中で、景色の変貌に呆然としたのだ。しかし、巡礼への思いは変わらないという。

心の傷を背負いながら、なぜ続けられるのか―。荒さんにそう質問すると、「息子の死がいまだに信じられないから。この巡礼は、息子に会うためのものだから」と答えてくれた。

私は、この女性の息子を思う強い心に打たれた。家族を亡くした荒さんのような遺族は大勢いる。その一人一人にかけがえのない家族があり、深い絆と思いがあり、今の日常がある。そんな当たり前のことに気づかされた。巡礼の旅はこれからも続く。貴行さんに再び会える日まで。

2112B02 佐々木翔平

被災地・閖上で聴いた「思い込み」と次の防災の可能性

2011 年３月 11 日の東日本震災の後、名取市の閖上という町をニュースなどで知り、なぜ数多く取り上げられるのか、考えたことはないだろうか。約 5500 人が暮らした漁港の町が多くの命と共に津波で失われた。「閖上には津波の経験が伝わっていなかった」と、家族を亡くした地元の遺族は語った。そこにはある「思い込み」が関わっていたのではないか、と取材を通して感じた。過去の大地震の津波から、なぜ教訓を生かすことができなかったのか。遺族の声とともに、閖上の震災を見詰め直してみたい。

「思い込み」がなかったら―という仮説

震災前名取市閖上には約 5500 人が暮らしていたが、東日本大震災の津波によって約 800 人もの尊い命が失われた。「ここ閖上には津波は来ない」―。閖上に住んでいた住人の多くは震災前、そう思い込んでいたという話を聞いた。

「これまで大きな地震が発生しても、閖上に津波は来なかったから」という誤った認識、つまり“思い込み”があったとすれば、避難が遅れ、結果的に被害の拡大へとつながってしまった可能性もある。

実際に私は、東日本大震災の地震の後、住人に警戒を呼びかけていた消防団員に「閖上には津波は来ないんだよ？　何をしているの？」と、一人のおばあさんが問うていたという話を聞いた。また閖上中学校では、地震と火災に備えた避難訓練はあったものの、津波を想定した訓練は行なわれていなかった、という。「津波は来ない」という固定観念が、住民の多くの意識から、学校の防災教育にまで反映されていたと言えるのではないだろうか。

過去の地震・津波の伝承を刻む石碑

「閖上では過去の津波の経験が伝えられていなかった」。これは、私が授業の現地取材で聞いた、中学生だった息子さんを亡くした語り部の女性の証言である。

東日本大震災以前の東北の災害史をたどっていくと、89 年前の昭和 8 年(1933 年)3 月 3 日にも、昭和三陸津波という大災害があった。その際には巨大な津波が岩手県を中心にした三陸地方を襲い、3000 人以上の死者・行方不明者を生んだ。が、閖上では人命が失われるような津波の被害は伝承されていない。

実は、閖上の日和山と呼ばれる高台には、当時の先人たちがこの出来事を後世、つまり今を生きるわれわれに教訓として語り繋ごうと建てた石碑がある。「石碑の存在が住民に語り継がれ、中学校などで教えられていれば、大震災の惨禍も変わっていたのではないか」と、閖上で活動をする別の語り部の男性は語った。

遺族に映る現状は「復興」か「復旧」か

大震災から 10 年余りの月日が流れ、間もなく丸 11 年となる。2011 年から現在まで閖上

では何が変わり、そして何が変わらなかったのだろうか。メディアでは「復興した」「復興しつつある」と報道されているが、果たして本当にそうだろうか。

そもそも「復興」とは何を指すのだろうか。前述した息子さんを津波で亡くした母親は、私たちの取材で「“復興”したのではなく“復旧”なのではないか」と語った。「息子が帰ってこない限り、私に復興はありません」とも。震災前の古里が戻ることが「復興」であって、きれいな新しい町並みが整備された今の姿は「復旧」―。この遺族の目にはそう映っているのだろう。

自らの土地の歴史を学び、防災教育へ

次にまたいつ、大きな地震や津波が起こるか、誰にも分からない。そんな災害大国・日本に住む私たちには早急な課題がある。まず今住んでいる土地の来歴を掘り起こして学び、住民への防災教育として伝え、次へ次へと対策に生かしていくこと。それこそが大切なのではないか。「今までに被害を受けていなかったから安心・安全」だという保証はどこにもない。東日本大震災はそれを教えた。

これからも生きて、生きて生き抜いていくために、今もし災害が起こった時、自分自身がどういった行動をとるのか、真剣に考えてみてほしいと思う。

「悲しい話だからこそ聴いてほしい」。閖上のある語り部の方が、最後に私に語ってくれた言葉である。悲しみから目を背けず、忘れ去ることなく、震災について知る機会をつくってほしい、という体験者の願いなのかもしれない。

2114B12 工藤優歩

「被災者」になって一変、震災後の「世界」の見え方

2011 年３月 11 日に起きた東日本大震災の津波被災地、名取市閖上の語り部、丹野祐子さんと出会った。13 歳の息子、公太さんを亡くし、その体験と思いを語り部として伝え続けている。「震災の前、息子には『勉強しなさい』とよく言っていたことを後悔している」「被災者となるまで、ニュースで見る災害の映像は他人事だった」―。震災の前と後で、自分の気持ちや考え、取り巻く世界の見え方が変わってしまったという。丹野さんに話を聴いた。

震災前は考えることもなかったこと

丹野さんは震災前、公太さんに母親としてふだん「勉強しなさい」とよく言っていたという。母親が子どもの勉強に小言を言うことに疑問を持つ人はあまりいないだろう。子どもを叱ることは必要なことである。しかし、丹野さんは今、「あんなことを言ってごめんね。ひどい母親だったね」と悔いているとい語った。震災が一瞬にして、当たり前のことを「罪」のようにしてしまった。震災がなければ後悔するはずのなかったことだろう。母親が本来感じる必要のない思いを、一度の震災でこの先もずっと抱えなければいけなくなった。

震災後に変わった、ニュースの被災地の見え方

東日本大震災の後も、日本各地で大きな災害が多く起きており、大地震や大水害などがテレビで毎年報じられている。このような災害のニュースについて、震災後どのように感じるかを丹野さんに、授業で取材した機会に伺った。

丹野さんは「震災前に見たニュースはテレビの向こうの他人事だったが、震災後は『被災地が目に見えるようになった』」と語った。テレビに映る情報しか知らなかったが、震災後は、ニュースから被災地がありありと見えるようになり、「他人事」ではなくなったという。

そして、被災を経験したことがない人に「遺族にはなってほしくないと」いう強い思いを抱いている。たとえ被災者になっても「自分の命だけは守り、その後、隣の人を守ってほしい」と訴える。

丹野さんのメッセージを大切に受け取ろう

丹野さんが震災後、息子さんに申し訳なく思っているという悔いも、日本各地の災害が他人事でなくなったことも、東日本大震災がなければ、おそらく一生感じずにいたことだったのではないか。それは、わが子を亡くした親御さんが背負い続ける思いなのであろう。

災害の見方が変わった、という言葉は、自身が被災したからこそ見えたことであろう。

当事者にしか分からない大切なことを、丹野さんは伝えてくれる。自分のつらい体験と思いにも関わらず、「命だけは守り、遺族になってほしくない」と呼び掛ける丹野さん、そして多くの被災者の思いを私たちは受け取り、学んでいかなければいけない。「自分事」にしていかなければならない。